2011年　4月5日　第14号

つたのは通信

特定非営利活動法人　としま遺跡調査会

このたびの東北地方太平洋沖地震により、お亡くなりになられた方々に心よりお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆様に、謹んでお見舞い申し上げます。

皆様の安全と被災地の一日も早い復旧を心よりお祈りいたします。

雑司が谷駅構内遺跡解説板の展示替え

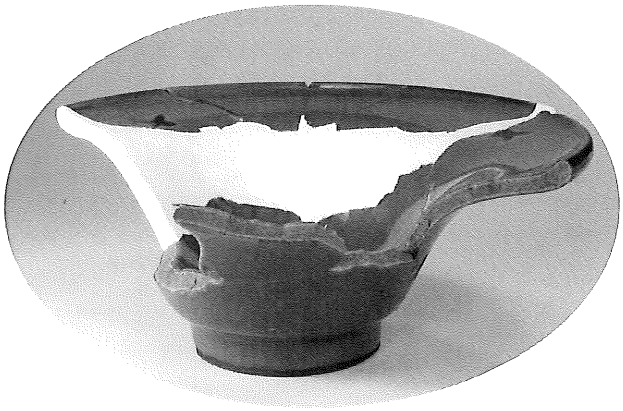
“竹本焼 終焉の地”

今回の遺跡解説板では、雑司が谷遺跡で出土した竹本焼の貴重な資料が掲載されています

東京メトロ副都心線雑司が谷駅構内の遺跡解説板が３月末に展示替えされました。今回の展示は、豊島区ゆかりのやきものである「竹本焼（たけもとやき）」です。雑司が谷遺跡の発掘調査で出土した竹本焼やこれにちなんだ内容となりました。

「竹本焼」の窯は、当初は現在の高田一丁目に開かれ、40年ほど操業しましたが、後に現在の雑司が谷三丁目に移転します。雑司が谷遺跡では、その製品であるとされる碍子（がいし）（絶縁体）類が多数見つかってきましたが、副都心線雑司が谷駅地区の発掘調査では、生産に用いられたと考えられる様々な道具類も大量に発掘されました。

竹本焼は、旧幕臣旗本の竹本要斎が興したやきものです。幕末の激動期、要斎は御側御用取次・外国奉行などを務めた能吏でした。しかし、明治維新を機に武士を捨て、含翠園というやきものの窯を興し、陶磁器の生産を始めました。含翠園は、現高田一丁目の要斎の屋敷地内に廃窯された登り窯を移築、創業されました。初期の製品は、欧米への輸出用として人気の高かった薩摩焼風金襴手のものを中心としており、評価は高かったようですが採算はとれず、経営のために煉瓦や土管といった建材なども生産するようになったということです。



雑司が谷遺跡から出土した竹本焼の青磁鉢

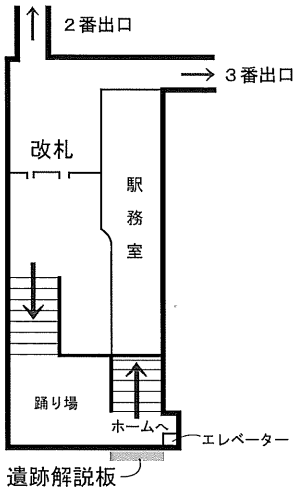
３回目の展示替えとあってスムーズに設置できました

そんな中で、明治６（1867）年、含翠園は火事を出し、窯を失ってしまいます。要斎の息子で二代目の隼太は、含翠園を再興するために研究を重ね、海外の技術を導入し、ついに生産再開にこぎつけます。製品は蕎麦釉・辰砂釉など、緑や赤色の微妙な発色と窯変に特徴がある釉薬を醍醐味としていました。美術工芸史に「竹本焼」とされる作品群は、おおむねこれ以降のものを指しているようです。

過去に深刻な経営難を経験している隼太は、その一方で、経営を下支えするため、実用品の生産にも手を染めていました。生糸の生産に欠かせない製糸機械の部品や、結髪に用いる笄の部分などです。いずれも、時代の要求を読んだ上で、含翠園の持つ技術を遺憾なく発揮した製品です。

その隼太は若くして病没、息子の皐一が三代目を継ぎます。皐一は父の仕事を踏襲した上で、さらに碍子類の生産をも始めました。明治41（1908）年には、工場を雑司が谷に移転、竹本園と称しました。さらに、大正４（1915）年には経営権を山下熊太郎氏に売却。昭和９（1934）年には遂に廃業し、ここに竹本焼の流れをくむやきものは終焉を迎えたのです。（両角まり）

明るい背景色で、構内でひと際目立つ解説板



構内遺跡解説板の場所

解説板は、雑司が谷駅構内で改札を入ってご覧になれます

“竹本焼ゆかりの地を巡る” のご案内

新しい解説板をご案内した上で、竹本焼の関連地を歩きます。

日時：2011年4月23日　土曜日　午前10時から午後0時まで　雨天決行

集合場所：東京メトロ副都心線 雑司が谷駅 目白通り側改札

内容：雑司が谷駅構内遺跡解説板説明、竹本園故地

案内：両角まり（としま遺跡調査会 調査

参加をご希望の方は、往復はがき　　でご応募下さい。

往：表には、**〒170　　-3-201　としま遺跡調査会**

雑司が　　い。

裏には、　　明記し、**ご住所・電話番号・お名前・**

参加人数　　書き下さい。

復：表には、**ご自分のご住所とお名前**（あて先）をお書き下さい。

裏には、何も書かないで下さい。こちらから、ご案内を記入して返信いたします。

終了致しました

豊島区立勤労福祉会館　文化カレッジ

考古学講座の受講生募集中

今年も、豊島区立勤労福祉会館（（財）としま未来文化財団）が主催している文化カレッジで、考古学講座を行います。座学の講義だけではなく、毎年好評のフィールドワークも企画しております。ぜひご参加下さい！

講座名：考古学から学ぶ豊島区とその周辺
開催日：5月14日～平成24年3月10日（8月休）
時間：午後2～4時
曜日：第2週の土曜日
回数：10回
定員：20名
費用：8,600円（交通費別途）
内容：江戸時代を中心として、遺跡・遺物を多角的に紹介していきます。

講座名：中世の城と館を歩いてみよう
～東京近郊の中世城館（じょうかん）をたずねて～
講師：橋口定志
開催日：5月7日～10月[illegible]（8月休）
時間：午後2～4時
曜日：第1週[illegible]日
回数：5[illegible]
定員：20名
費用：3,500円（交通費別途）

締め切りました

お問い合わせ：（財）としま未来文化財団　豊島区立勤労福祉会館
TEL：03－3980－3131（担当：加瀬）　　**締め切り：4月18日**

発掘調査情報

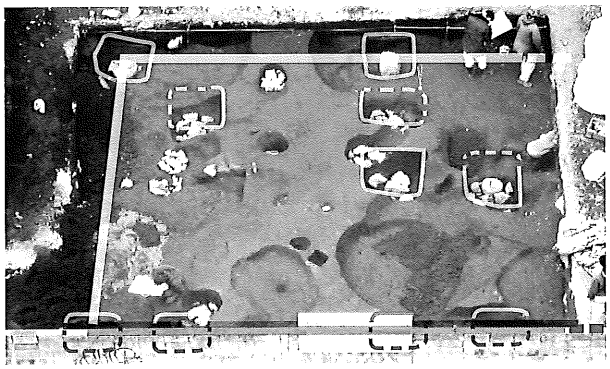
巣鴨遺跡で2時期の建物跡を検出！

3月に発掘調査された巣鴨遺跡アソシア巣鴨地区（巣鴨一丁目27番地）は、白山通りからは一歩奥に入った場所に位置します。本地区は、江戸時代には巣鴨町下中組内で、明治時代中葉には「梅屋敷」とも呼ばれていた徳川慶喜邸の一画にあたります。

今回発見された遺構は、江戸時代以降の建物跡2棟、溝状遺構、植栽痕等です。2棟の建物跡は、重複関係にあることから、異なる時期に建てられたことがわかりました。

古期の建物（右写真）は、調査した範囲内で南北7m、東西8m以上の規模を有し、出土した遺物の年代から江戸時代後期（1840年代）頃に建てられたものと推定されます。新期の建物は、はっきりとした時期は不明ですが、明治期に属す礎石建物です。

現在、整理作業中のため、結論を出すことはできませんが、前述のように、幕末～近代の巣鴨町の景観を復元する、また慶喜邸内の様相を考える上では貴重な成果でした。（高木翼郎）



発見された建物跡　太線内が古期の建物範囲です。大型の建物基礎が計10基発見されました。

『鬼子母神参道　江戸のにぎわい』展 終了のお知らせ

去る3月16日をもって、当会が雑司が谷案内処と共催した『鬼子母神堂　江戸のにぎわい』展を終えました。

延べ来場者数は、627人となりました。区内のみならず都外からも多くの方々に来場していただきありがとうございました。

来場者からは、「遺跡が身近にあることに驚いた」「今後もまた、発掘調査の展示がみたい」などの感想をいただきました。

当会では、さらに区内外の方々に、豊島区内の遺跡を知っていいただける機会を今後も企画してまいりますので、ご期待下さい。

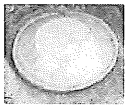
書籍紹介

胞衣に込めた人々の想い

中村禎里 著 『胞衣(えな)の生命(いのち)』

現在「おばあちゃんの原宿」という呼び名でにぎわう巣鴨の地下には、子供の成長を願う親の想いが数多く眠っている。この事実をまち行く人々がどれだけ知っているのであろうか。

近年、巣鴨遺跡で実施された発掘調査の成果で、地蔵通り沿いの町家跡には、「胞衣(えな)」を埋めたと考えられる遺構が多く存在することがわかってきている。この「胞衣」とは、出産の際に胎児と共に排出される胎盤や羊膜などのことである。これらは出産の後に排出されることなどから後産（のちざん、あとざん）とも言われており、古くから子供の分身として考えられていた。そのため子供の成長を祈願して、合わせ口の大かわらけ（土師皿）や壺などの容器に胞衣を納め、地中に埋めるという行為が行われてきたのだ。

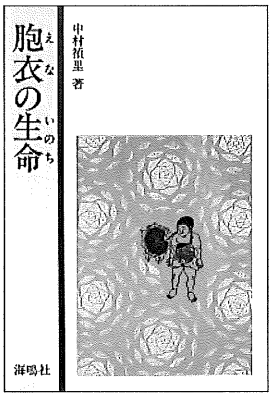


胞衣皿

地中に胞衣を埋める行為は、時代や地域、または身分などによって異なる作法を持っている。例えば、本書で指摘されているように、古代から近世初頭にかけてのいわゆる支配階級の胞衣埋納は、山中に埋めていたとされているが、近代に入ると一部の地域を除きそれが見られなくなる。また近代のある地域では、胞衣を敷居や入口といった「踏まれる場所」に埋められるが、古代中国などでは、このような場所に埋めることはタブーとされている。これは、胞衣が子供の分身として神聖視される一方で、血の穢れとして扱われることが要因の一つとしている。

本書では、古代から近代にかけての胞衣埋納法を時代ごとにまとめている。また、民俗学・宗教学・歴史学・考古学・文化人類学など、学問の垣根を越えて胞衣に関する研究がなされている。そして、各分野・学界の定説にとらわれることなく、総合的に判断した上で日本の胞衣埋納という行為を論じている。更には日本国内に留まらず、古代中国思想が胞衣に与えた影響を、日本の胞衣埋納と比較しながら検討しており、胞衣とは如何なるものかを知るうえで、なくてはならない一冊と言えよう。（榎本邦人）

※発掘調査報告書『巣鴨町IX』と『巣鴨VI』には、巣鴨遺跡で検出された胞衣埋納についての考察がされている。本書と合わせて参照されたい。



中村禎里著　海鳴社
定価：1,800円

【編集後記】

３月11日の大地震により、被災された皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

当会職員の有志は、日本赤十字社を通じ、心ばかりではありますが義援金として被災地に寄付させていただきました。また、このたびの大震災に対応した被災資料の保全活動を行っている「歴史資料ネットワーク」の主旨に賛同し、こちらにも職員有志で義援金を寄付させていただきました。

被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

編集・発行　特定非営利活動法人 としま遺跡調査会

〒170-0002　東京都豊島区巣鴨3-8-9　巣鴨複合施設201号室
Tel・Fax　03-3915-6962　　E-mail　tics389 @ a.toshima.ne.jp
ホームページアドレス：http://www.toshima-iseki.org/

「つたのは通信」の由来：蔦は大きな樹ではありませんが、生命力が非常に強い植物です。この蔦の葉が周囲の樹木や建物につたい茂るように、多くの人に遺跡の楽しさ、大切さを知ってもらいたいとの願いを込めて会報の名としました。また、染井遺跡を代表する大名屋敷である津藩藤堂家の家紋としても、馴染み深い植物です。

題字：湯澤和子　　ロゴデザイン：石原幸
イラスト：千葉弘美